

菅原道真と善淵愛成・物章鑿師・忠才子

佐藤 信 一

はじめに

「菅家文章」卷三、及び卷四は、菅原道真の讃岐守時代の作品が収められている巻である。従来は「文章博士の職にあつた者の地方官転出は異例とはいえないが、菅家の棟梁として文章道の家学の担い手を自負する道真にとつては痛恨事であつた」とされる。確かに讃岐国への赴任は、道真にとつては「左遷」以外の何ものでもなかつたろう。ただ、そうした状況にあつても、道真は詩を詠み続けたのである。しかも、数度にわたつて地方在住の詩人達と詩を詠じ合っているのだ。これは一体どういふことなのか、また、その営みは道真の詩に何をもたらしたのか、その一端でも明らかにすることが、本稿の目標である。

今回は、卷四に収める305「對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子」。(殘菊に對ひて懷ふ所を詠じ、物・忠兩才子に寄す。)と、続く306「吟善淵博士・物章鑿師兩才子新詩、戲寄長句」。(善淵博士・物章鑿師の兩才子が新詩を吟じて、戲れに長句を寄す。)を中心に見て行きたい。

305

「對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子。」と、306「吟善淵博士・物章鑿師兩才子新詩、戲寄長句。」とをめぐつて

305、對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子。(殘菊に對ひて懷ふ所を詠じ、物・忠兩才子に寄す。)

思家一事亂無端 家を思へば一事も亂れて端なし

半畝華園寸步難 半畝の華園も寸歩し難し

偏愛夢中禾失盡 偏に愛む夢の中に禾の失ひ盡きむこととを

不知籬下菊開殘 知らず籬の下に菊の開き殘れること

風情用筆臨時泣 風情筆を用ひて時に臨みて泣く

霜氣和刀每夜寒 霜氣刀に和して夜毎に寒し

莫使金精多詠取 金精をして多く詠み取らしむること莫れ

明年分附後人看 明年は後人に分附して看しめむ

306、吟善淵博士・物章鑿師兩才子新詩、戲寄長句。

(善淵博士・物章鑿師の兩才子が新詩を吟じて、戲

れに長句を寄す。

颯颯松窓獨臥時

颯颯たる松窓に獨り臥す時

相迎僚友見文詞

僚友を相迎へて文詞を見る

大春堂下寒吟逸

大春堂下寒吟逸びたり

弘景園中曉嘯悲

弘景園中曉嘯悲しめり

何啻離經稱博士

何ぞ啻に經を離れて博士と稱けむ

自慙合藥喚醫師

自ら藥を合せて醫師と喚ばるることを

閑思共有雕蟲業
應化使君昔詠詩

閑に思へば共に雕蟲の業有り
應化の使君も昔詩を詠じたり

ここで卷四、305番、306番詩を詠じた時点での道真の状況を確認しておく。この時は寛平元年（八八九）、道真は四十五歳である。この頃に寛平御時内裏菊合が行われている。道真が「秋風の吹き上げに立てる白菊は花かあらぬか浪のよするか」（「古今和歌集」秋下・二七二）と詠んだ時期である。前年には阿衡問題で基経を諫めている。また、翌年には秩滿ち帰京している。地方官として実績を積み上げていた時期である。従来はこの卷三、卷四の時期を道真が政治家としての理想を実現させようと邁進していた時期と捉えるのが一般であった。しかし、そこには別に道真の私人としての側面が見て取れるのではないか。公の場ではない、私の表現は如何になされているのかということを中心に見て行こうと思う。

「對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子。（殘菊に對ひて懷ふ所を詠じ、物・忠兩才子に寄す。）」から見て行きたい。「殘菊」

とは霜のために変色した菊であり、中国での用例として「白氏文集」卷一四、〇四「晚秋夜」「花開殘菊傍」「葉下衰桐落」「寒井」（花開きて殘菊踈籬に傍る、葉下ちて衰桐葉井に落つ。）などが検出されるが、中国では必ずしも多くない。しかしながら、日本では嵯峨朝以来の重陽宴で繰り返して詠じられていた。宴を背景にしたことばと見てよいと思われる。

ところで、道真は「殘菊」を多く詠じている。詩の中から確認しておく。卷一、3番詩「殘菊詩。」では「暮陰芳草歇、殘色菊花周。爲是開時晚、當因發處稠。染紅衰葉病、辭紫老莖凋。暮陰芳草歇く、殘色菊花周し。是開く時の晚きが爲なり、當に發く處の稠きに因るべし。紅に染まり衰葉病む、紫を辭して老莖凋ふ」としている。「殘菊」という景物を活写していると言えよう。道真は晩秋の景物である「殘菊」を詠じていることよって如何なる思いを語っているのだろうか。

卷二「晚秋二十詠。」の13「殘菊。」では「陶家秋苑冷、殘菊小籬間。爲是開時晚、應因得地閑。（陶家秋の苑冷しく、殘菊小籬に間つ。是開く時の晚きが爲にして、應に地を得ること閑なるに因るべし。）」とする。ここでも咲く時期の遅さが問題視されているよう。卷三、238「殘菊下自詠。以下五首、到京之作（殘菊の下自ら詠ず。以下五首、京に到りての作。）」では、「疎籬豈敢冒霜威、不恨凋殘氣力微。天下涼陰花下冷、主人外吏故人稀。（疎籬豈に敢へて霜威を冒さむ、恨まず凋殘して氣力微なることを。天下は涼陰にして花の下も冷し、主人は外吏にして故人も稀なり。）」と、「故人」、友人も少ないと述べる。その要因として「外吏」、讃岐守という地方官である

ことが挙げられているのに注意しておく。

卷四、21「路邊殘菊。」では、「菊過三重陽似失時、相憐好是馬行遲。(菊は重陽を過ぎて時を失ふに似たり、相ひ憐れむ好是し馬の行きの遅きことを。)」とする。讀岐守時代の旅の実体験が描かれていると思しい。「似失時」とされていることに注意しておく。「菊」が「時」の経過を描くことと分ちがたく捉えられていよう。

また、当該詩以降の用例だが、卷五、356「惜殘菊、各分一字、應製。并序。(殘菊を惜しむ、各一字を分く、製に應ず。序を并せたり。)」では、序で「黃華之過三重陽、世俗謂之殘菊、今之可惜、非有レ意乎。(黃華の重陽を過ぎたる、世俗に之を殘菊と謂ふ、今之之惜しむべき、意有るに非ず。)」とした上で、詩では、「寒鞭打後菊叢孤、相惜相憐意万殊。(寒鞭打ちて後菊の叢ぞ孤なる、相ひ惜しみ相ひ憐れぶ意万殊なり。)」とする。「孤」の投影を見る。360「假中書懷詩。古調。(假中懷ひを書す詩。古調。)」は、休暇中の述懐の詩だが「早起呼童子、扶持殘菊花。日高催老僕、掃除庭上沙。暮繞東籬下、洗拂竹傾斜。(早起きて童子を呼び、扶持す殘菊の花。日高くして老僕を催し、掃除す庭上の沙。暮に東籬の下を繞り、洗ひ拂へば竹傾斜く。)」と「殘菊」が詳細に叙述されている。「東籬」は陶淵明の詩によるものであろうし(「菊を採る東籬の下、悠然として南山を看る。」「老僕」も陶潜の「歸去來辭」を想起させる言葉である。つまり、ここでの「殘菊」の叙述は先行する表現に依拠するものといえよう。381「暮秋、賦三秋盡詠菊、應令。并序。(暮秋、秋盡きて菊を詠ぶといふことを賦す、令に應ず。序を并せたり。)」では序に「于時九月廿七日、孰不謂之盡秋。孤叢兩三莖、孰不謂之殘菊。(時に九月廿七日、孰か之盡きたる秋と謂はざらむ。孤叢兩三莖、孰か之殘菊と謂はざらむ。)」とする。季節の終りに己が人生の終末を重ね合わせてみているのである。そんな中で菊の花はぼつんと二三本ずつが寄り添って嚴寒の冬に抗うかの如くであるとしている。ここでも「孤」と叙述されていることに注意したい。

ふことを賦す、令に應ず。序を并せたり。)」では序に「于時九月廿七日、孰不謂之盡秋。孤叢兩三莖、孰不謂之殘菊。(時に九月廿七日、孰か之盡きたる秋と謂はざらむ。孤叢兩三莖、孰か之殘菊と謂はざらむ。)」とする。季節の終りに己が人生の終末を重ね合わせてみているのである。そんな中で菊の花はぼつんと二三本ずつが寄り添って嚴寒の冬に抗うかの如くであるとしている。ここでも「孤」と叙述されていることに注意したい。

卷六、443「九日後朝、侍朱雀院、同賦閉居樂秋水、應太上天皇製。并序。(九日の後朝、朱雀院に侍りて、同じく閉居秋水を樂しむといふことを賦す、太上天皇の製に應ず。序を并せたり。)」に「嗟乎、節過三重陽、殘菊猶含舊氣。心期三百歲、老松彌染新青。(嗟乎、節重陽を過ぎて、殘菊猶ほ舊氣をふくむがごとし。心百歲を期して、老松彌染新青に染む。)」では「老松」と対になることで一層長寿を言祝ぐ表現となつていよう。

451「對殘菊待寒月。(于時閏十月十七日、陪第九皇子詩亭。)(殘菊に對して寒月を待つ。(時に閏十月十七日、第九皇子の詩亭に陪り。))」は「月初破却菊纒殘、漁夫樵夫抑意難。况復詩人非俗物、夜深年暮泣相看。(月初めて破却し菊纒かに殘れり、漁夫樵夫すら意を抑ふること難し。况復むや詩人の俗物に非ざるはや、夜深け年暮れて泣きて相ひ看る。)」と「漁夫」「樵夫」も殘菊を愛でずにいられない、としている。ここは「夫」の字が七言句の二文字目と四文字目に使われており二四不同の作法に悖るが、道真是このまま詠じている。461「九月

451「對殘菊待寒月。(于時閏十月十七日、陪第九皇子詩亭。)(殘菊に對して寒月を待つ。(時に閏十月十七日、第九皇子の詩亭に陪り。))」は「月初破却菊纒殘、漁夫樵夫抑意難。况復詩人非俗物、夜深年暮泣相看。(月初めて破却し菊纒かに殘れり、漁夫樵夫すら意を抑ふること難し。况復むや詩人の俗物に非ざるはや、夜深け年暮れて泣きて相ひ看る。)」と「漁夫」「樵夫」も殘菊を愛でずにいられない、としている。ここは「夫」の字が七言句の二文字目と四文字目に使われており二四不同の作法に悖るが、道真是このまま詠じている。461「九月

盡日、題「殘菊」、應「太上皇製」。(九月盡日、殘菊に題して、太上皇の製に應ず。)
「蘆簾砌下水邊欄、秋只一朝菊早寒。幸被君臣交畝種、任意氣滿園殘。」(蘆簾の砌の下水邊の欄、秋は只一朝菊早く寒えたり。幸に君臣畝を交へて種をむむことを被る。任意氣園に満ちて殘る。)
とある。「君臣」が共に並んで菊を植えるのである。理想的な君臣關係といつてよろう。君臣の間柄を取り持つ、換言すれば、君臣融和をもたらしめるものとして「菊」が機能している様が見て取れよう。

『菅家後集』506「秋晚題「白菊」。(秋の晩に白菊に題す。)
では「涼秋月盡早霜初、殘菊白花雪不如。(涼秋月盡きて早霜の初め、殘りの菊の白き花は雪も如かず。)」とする。雪にも劣らない白さであるとする。その白さには、道真自身の身の潔白も重ね合わされているのではないだろうか。

これらを通覧して気付く点は、公の宴を詠じながら、その中に沁みだしてくる道真個人の感懐とでもいうべきものが契機となつていくということである。当該305番詩でも「懐ふ所を詠じ」るものとなつていく。道真がこの詩を寄せた「物忠兩才子」とは、物才子と忠才子の二人ということであろう。大系は物才子を、306番詩の物章豎師と同一人物であろうとするが、それに従つておく。それは、305番詩、306番詩ともに詩を媒介とした篤い友情が説かれていられるからである。宴での公的な表現というよりも個人の詩が契機になつていくと捉えられぬいか。

305番詩對「殘菊」詠し所懐、寄物忠兩才子。(殘菊に對ひて懐ふ所を詠じ、物・忠兩才子に寄す。)から見て行く。

初句では「思家一事亂無端(家を思へば一事も亂れて端なし)」と、京都の留守宅に対する道真の暗澹たる想いが語られていく。そこは道真にとつて帰るべき地であつたらう。「無端」は、「觀智院本類聚名義抄」に「スズロニ」の訓があり、道真の思いの乱れが尋常成らざるものであつたことを物語る。

そのため、「半畝華園寸步難(半畝の華園も寸歩し難し)」とする。大系は「ちよつとはかり散歩をしようという気にもなれない」と訳すが、詩句のリズムに注意したい。「半畝」「寸歩」と脚韻ではないが、末尾の音がリズムに感じられ、初句で感じざるを得ない絶望感を減殺する効果があるのではなからうか。次に「偏愛夢中禾失盡(偏に愛む夢の中に禾の失ひ盡きむことを)」は、「禾」と「失」を合わせると「秩」となるという

大系の説を支持したいが、「秩」が尽きるとはどういうことなのか、任期がなくなることか、もう少し検討する必要があると思われる。むしろここから感じられるのは、道真の故郷である都の近くの莊園の生活感が、鮮やかに表出されていることに注意すべきだろう。「不知籬下菊開殘(知らず籬の下に菊の開き殘れること)」では、陶淵明の「飲酒十二首(五)」の「採菊東籬下、悠然見南山(菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る)」に拠りながら、「不知(知らず)」と否定的に語られていることに注意しておく。

「風情用筆臨時泣(風情筆を用ひて時に臨みて泣く)」に對して、大系は「存疑」とした上で「殘菊の風情は、筆をもつたまま(苦吟したり、吏務をみたりして)、どうかすると泣く人(道真)の姿に似ている意か」とする。殘菊の風情かどうかは

疑問が残る。ここでの「風情」とは、単に有様を意味するのではなく、風雅な趣、それを解する心の意ではあるまいか（『白氏文集』一七、嘸「薔薇正開、春酒初熟。因招劉十九・張大夫・崔二十四同飲（薔薇正に開き、春酒初めて熟す。因りて劉十九・張大夫・崔二十四を招きて同飲す）。」「試將詩句相招去、儻有風情或可來（試みに詩句を將つて相招去せん、儻し風情有らば或ひは來るべし）。」ここは風情を解する心があれば来ようということと捉えられよう。だとすれば、ここは風情を解する心を持つ私道真是執務の筆を執りながらその時になつて泣く、の意にならう。

対句になる「霜氣和刀每夜寒（霜氣刀に和して夜毎に寒し）」であるが、類似した寒氣の激しさを刀に見立てる表現を道真是何度も用いている。卷一、21「秋夜。離合。」初二句「班來年事晚、刀氣夜風威（班ち來りて年事晚し、刀氣夜の風威し）。」や、67「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分二字。探得迎字」（早春に、右丞相の東齋に陪りて、同じく東風梅を粧はしむといふことを賦す。各一字を分つ。探りて迎の字を得たり）。」の五、六句「先吹煖火類温熨、更作霜刀且剪成（先づ煖火を吹きて類に温め熨す、更に霜刀を作して且く剪りて成る）」とあるのは霜の厳しさを刀で喩えたものである。もちろんここでの「刀」は「筆」と対句になるのであるから文具、紙を切る小刀であろう。ただ、「刀」とされていることの意味は重いのではなからうか。

『昔家後集』、475「冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」（冬日、庭前の紅葉に感じて、秀才淳茂に示す）。」には、「茅蒐霜染憐

無_レ限、刀刃風裁惜_レ不能（茅蒐霜染めて憐れむこと限り無し、刀刃風裁して惜しむこと能はず）」とあり、485「秋夜。九月十五日。」頸聯「月光似鏡無_レ明_レ罪、風氣如_レ刀不_レ破_レ愁（月光は鏡に似たれども罪を明らかにむること無し、風氣は刀の如くなれども愁へを破ることあらず）」などと好んで用いているのではないかと思われるのである。

「莫_レ使_レ金精多詠取」（金精をして多く詠み取らしむること莫れ）」であるが、この「金精」とは秋の氣の意ではないか。庾信「小園賦」「雲氣蔭_レ於叢_レ著、金精養_レ於秋_レ菊」（雲氣叢著を蔭ひ、金精秋菊を養ふ）。」は、大系も挙げる用例だが、「藝文類聚」八「秋」「梁庾肩吾奉_レ和_レ便省餘_レ秋詩曰。前對金精坡。傍臨圓水池。照_レ影礙_レ浮葉。看_レ山通_レ迴_レ枝。鴈行連霧盡。雨足帶_レ雲移（梁庾肩吾便省餘に和し奉る秋の詩に曰く。前に對ず金精の坡。傍に臨む圓水の池。影を照らし浮葉を礙らす。山通を見て枝を迴す。鴈行連なりて霧盡く。雨足雲を帯びて移る。）」も同じく庾信の作である。大系は「この辺地の殘菊のがめも、今年の秋限りだの意」とする。道真の任期と関連しているのである。ただ、ここでは「莫_レ使_レ金精多詠取」（金精をして多く詠み取らしむること莫れ）」と、そうした「金精」に對して詩を詠むことを禁じている点に注意したい。道真は他の誰よりも物才子と忠才子との二人の方に詩を詠じて欲しかったのではないだろうか。

「明年分_レ附後人一看（明年は後人に分附して看しめむ）」では、自分の讃岐守としての任期が満ちることが背景にあるであろう。「分附」を大系は「交替引繼の術語」とするが、「尚書正義」に

「安國以孔子之序二分附篇端」（安國孔子の序を以て篇端に分附す）とあるものの詩語には用例を見ない。ただ、このことばを道真是ここにしか用いておらず、いわば、友人との藪の場面に公式な術語を用いていることに注目しておきたい。そこには道真の「所懐」が仄見えていないか。このような専門用語、換言すれば詩語以外のことば、とりわけ地方官僚の専門用語を友人たちとの詩で用いることによって、詩語を共有する共同体としての仲間として彼らとの紐帯を強固たらしめようとしたのではなかったか。

この305番詩では、「菊」も含めて公の場でのことばを応用した詩句が、道真の友人たちとの間で用いられているのである。

次に306「吟善淵博士・物章鑿師兩才子新詩、戲寄長句」（善淵博士・物章鑿師の兩才子が新詩を吟じて、戯れに長句を寄す。）に論を移そう。この詩では、善淵博士と物章鑿師とが自分達が新たに作った詩を道真に示しているのである。詩に「僚友」とあるように、師弟関係というよりも対等な文学上の創作者同士であったのではないか。

「颯颯松窓獨臥時、相迎僚友見文詞。（颯颯たる松窓に獨り臥す時、僚友を相迎へて文詞を見る）」であるが、「颯颯」は、風がさっと吹く様子や風音の形容。「楚辭」九歌、山鬼「颯颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂（颯颯として木蕭蕭たり、公子を思ひて徒に憂ひに離る）」とあるように、文脈から離別の憂いを連想させることばではあるまいか。そのように風が吹き寄せる窓に道真が一人で寄りかかっているとき、仲間を迎えて彼らの文章を見た。「僚友」は、同役の仲間の意で、「禮記」

「曲禮上」に「僚友稱其弟也。執友稱其仁也。（僚友官同者、執友志同道合。）（僚友は其の弟を稱するなり。執友は其の仁を稱するなり。）（僚友は官の同じ者、執友は志の同じ者。）」とある。ここにはそうした仲間達と詩を賦し合いたいとする道真の思いが見て取れないだろうか。

「大春堂下寒吟逸、弘景園中曉嘯悲（大春堂下寒吟逸びたり、弘景園中曉嘯悲しめり）」の「大春堂」とは、具体的には未詳だが善淵博士、善淵愛成の経歴から推測すると大学寮の明経道院東舎の異称かとされている。そこで善淵愛成は、「寒吟」する。「寒吟」とは冬の寒い日に歌うこと。愛成が冬の夜に詠じた詩の謂いであろう。中国の用例としては、方干「題桐廬謝逸人江居」（桐廬謝逸人江居に題す）に「湖邊倚杖寒吟苦、石上橫琴夜醉多。（湖邊杖に倚りて寒吟苦しく、石上琴を横たへて夜醉多し。）」とある。「寒吟」とすることで愛成の文学に對する真剣な態度が表現されていると思われる。

「弘景園」は、陶弘景の薬草園。物章の薬草園を喩えたものだろう。陶弘景とは、南朝、齊・梁の学者で、幼年時代に、葛洪の神仙伝を読み、養生の志を抱いたとされる。没年は五三六年。「曉嘯」は、あかつきに詠じた詩、または、あかつきの吟詠をいう。物章は薬草園で夜明け前に詠じた詩を朗唱したのである。愛成の「寒吟」と見合うものである。

次の聯で道真は二人の友人を揶揄的に叙述する。「何啻離經稱博士、自慙合藥喚鑿師。（何ぞ啻に經を離れて博士と稱けむ、自ら藥を合せて鑿師と喚ばるることを慙つ。）」であるが、五句では明経道を学ぶ愛成に、このような讃岐の片田舎にまで

来てくれて「經」から離れて「博士」といえようかとしているのだが、これは振り返ってみれば道真が置かれた状況に他ならないものであった。六句になると、物章は自分で薬を調合しているが、自分は医者の柄ではない、さつさと辞めて作詩三昧の生活に入りたいと願っていると述べているのではないか。大系が入谷義高氏の言を引いて「(物章が)自嘲したことはをそのまま詩によみこんだのである」とするのに従っておく。ただここで道真の他の詩の表現を参照したい。204「寒早十首(五)」である。全文を引く。「何人寒氣早、寒早薬圃人。弁種君臣性、充徭賦役身。雖知三時至採、不療病來貧。一草分鉢缺、難勝鉢決類。(何れの人にか寒氣早き、寒は早し薬圃の人。種を弁ず君臣の性、徭に充つ賦役の身。時至らば採ることを知ると雖も、病ひ來りて貧しきことを療さず。一草分鉢をだに缺かば、鉢決の類りなるに勝へ難からん)」というもの。内容は薬畑の園丁は、薬草の善し悪しを弁ずるが、それは君と臣下の別にも通じるとし、薬草園で働くことを以て賦役に充当しているとした上で時節が到来すれば薬草を採るが、病氣のためにいつも貧しい、たった一本の薬草のほんの一握りでも欠かしたら鞭でひどくたたかれ耐え難いだらうといった内容である。物章の自嘲にも似たことばの背景として、この「寒早十首(五)」の「寒は早し薬圃の人。」及び全体で述べられている「薬圃の人」の労苦が想定できるのではないだろうか。この聯の反語を重ねた鬱屈とした表現の背景に「寒早十首。」に見られる社会批判があるのではないか。

最後に「閑思共有三雕蟲業、應化使君昔詠詩。(閑しんに思へ

ば共に雕蟲とうちゆうの業有り、應化おうくわの使君も昔詩を詠じたり)」であるが、道真は自分と愛成・物章との共通点として「雕蟲業」を挙げる。「雕蟲」とは、虫の形を彫刻するように、文章の字句を細かく飾る意。道真はこの三人がともに詩句文章を微細に綴り上げて行くことを業にしていると宣言しているのである。道真は讃岐にあつても決して一人つきりではなかつたのである。もちろん三人が実際に席を同じくして詩を詠み合う必要はない。三人が詩を携えて行き来するというよりも兼題であつたらう。

「應化」とは、仏教語で仏や菩薩が衆生を救済するため、相手に応じて様々に姿を変えてこの世に出現する意。「大唐西域記」七に「時天帝釋欲驗修善薩行者、降靈應化爲一老夫(時に天帝釋の菩薩の行を驗修せんと欲するは、靈を降して應化し一老夫と爲る)」とある。ところで「應化使君」が誰を指すのかは、大系に拠れば未詳であるが、むしろここでは「昔詠詩(昔詩を詠じたり)」とある方に注意したい。「詩」を媒介させた紐帯が道真や愛成・物章を一つの觀念共同体に繋ぎ止めていたのである。そのことで、言ってみれば共同体を媒介させることで詩を織りなしていたのである。

善淵愛成について

この善淵愛成は、「昔家文章」の他の箇所にも登場する。引いておく。元慶三年(八七九)、三十五歳著述の巻七54、「日本文徳天皇實錄序。奉三家君教二所製也。(日本文徳天皇實錄序。家君の教を奉じて製する所なり。)」に「伏惟、太上天皇、孝治有日、文思垂風。夢想先皇之起居、庶幾聖主之言動。去

貞觀十三年、詔右大臣從三位行左近衛大將臣藤原朝臣基經中納言・從三位行民部卿兼春宮坊太夫臣南淵朝臣年名・參議正四位下左大弁臣大江朝臣音人・外從五位下行大外記普淵朝臣愛成・正六位上行小内記都宿禰言道・散位正六位上嶋田朝臣良臣等數人、據舊史氏、始就撰修。三四年來、編錄疎略。適屬揖讓、刀筆暫休（伏して惟みれば、太上天皇、孝治日に有り、文思風を垂る。先皇の起居を夢想す、聖主の言動をこひねがふ。去る貞觀十三年、右大臣從三位行左近衛大將臣藤原朝臣基經中納言・從三位行民部卿兼春宮坊太夫臣南淵朝臣年名・參議正四位下左大弁臣大江朝臣音人・外從五位下行大外記普淵朝臣愛成・正六位上行小内記都宿禰言道・散位正六位上嶋田朝臣良臣等數人に詔し、舊史氏に據り、始めて撰修に就く。三四年來、編錄疎略なり。適揖讓に屬し、刀筆暫く休す。」と、は

じめて歴史書を編纂したが、三四年は記録が粗略であった。たまたま平和裏に禪讓が行われ刀筆、記録もしばらく行われなくなつた、とするが、愛成も編纂者の一人に名を連ねているのである。

次に貞觀十四年（八七二）の卷一〇、614「爲大學助教普淵朝臣永貞請解官侍母表（大學助教普淵朝臣永貞の爲に官を解き母に侍らんことを請ふ表）」を見よう。この時道真は二十八歳、自身母の喪によつて解官している。そこに「終鮮兄弟。臣弟少外記愛成身居顯官、才亦可_レ用（終に兄弟鮮し。臣弟少外記愛成身は顯官に居り、才亦た用ふべし。）」とあり、「弟愛成出爲魏闕之臣。臣永貞入爲寒閨之子（弟愛成は出でて魏闕の臣と爲り、臣永貞は入りて寒閨の子と爲らん。）」と兄が

「寒閨」、寂しいねやの子どものなに対して「魏闕」、朝廷の臣下であるとする。これも貞觀十四年の作品である。兄の永貞が仁和元年（八八五）に七十三歳で没しており、この時、道真は四十一歳であることから、愛成も道真より年長だったのでなからうか。

また、「菅家文章」、「菅家後集」には収められていないが、仁和四年（八八八）四十四歳での著述の676「奉昭宣公書。菅丞相讚州刺史時。（昭宣公に奉る書。菅丞相讚州刺史の時なり）」に見る。昭宣公とは藤原基經のことである。そこには「左大弁廣相朝臣、奉勅作答大府（基經）上章之勅書云、以阿衡之任爲公之任。明經普淵愛成等、引三毛詩、尚書君夷之義。即述其說云、阿衡者三公之官、坐而論道。（左大弁廣相朝臣、勅を奉じ大府（基經）の上章に答ふるの勅書を作りて云はく、阿衡の任を以て公の任と爲さんと。明經普淵愛成等は、毛詩、尚書君夷之義を引く。即ち其說を述べて云はく、阿衡は三公の官にして、坐して道を論ずるなりといへり。）」とする。藤原佐世の訴えに対し、起草者の橋廣相を弁護しているのである。道真と志を同じくするものと思しい。

325、依病閑居、聊述所懷、奉寄大學士。（病ひに依りて閑居す、聊か所懷を述べ、大學士に寄せ奉る。）
含情海上久蹉跎、情を海の上に含みて久しく蹉跎たり
猶恨虛勞動宿痾、猶は恨むらくは虚勞宿痾を動かすこと
を

脚爰無堪州府去、脚の爰は堪ふること無くして州府を去

りぬ

頭瘡不放故人遇

斯兒悶見魚生釜 頭の瘡は放たずして故人に遇へり

門客笑歸雀觸羅 斯兒悶えて見る魚の釜に生ずることを

身未衰微心且健 門客笑ひて歸る雀の羅に觸るることを

身未衰微せず心且に健やかならんとす

醫治有驗復如何 醫治驗有らば復た如何にかせん

この大學士が誰なのかは未詳だが、大系は「あるいは大學博士の博字脱か。」とする。その上で善淵愛成が仁和二年（八八六）に大學博士となった閔歴を挙げ、寛平二年春に愛成が病氣になった事実を紹介している。はたして善淵愛成は「大學士」たり得るのか、詩の叙述から探つて行こう。

首聯、初・二句「含情海上久蹉跎、猶恨虚勞動宿痾」（情を海の上を含みて久しく蹉跎たり、猶ほ恨むらくは虚勞宿痾を動かすことを）では、題詞で言及した「病」によつて、海の畔で思いに沈んで長らく「蹉跎」、つまり怠っている、とする。その上で体が衰弱したことによる疲労が、持病を悪化させることを残念に思うとしている。讃岐守道真の精神的な困憊が見て取れよう。

具体的には含聯、三・四句「脚灸無堪州府去、頭瘡不放故人遇（脚の灸は堪ふること無くして州府を去りぬ、頭の瘡は放たずして故人に遇へり）」では、具体例として「脚灸」と「頭瘡」を挙げる。卷三、229「代翁答之（翁に代りて答ふ）。」転・結句「毒瘡腫爛傷脚偏、不記何年自小童」（毒瘡腫れ

爛れて傷む脚偏めり、何れの年といふことを記さず小き童よりなり）。」とあるように、道真は病に閔しても具体的に描写するのである。

その上で頸聯、五・六句「斯兒悶見魚生釜、門客笑歸雀觸羅（斯兒悶えて見る魚の釜に生ずることを、門客笑ひて歸る雀の羅に觸るることを）」では、「後漢書」一九「相聚愉生、若魚遊釜中、知其不久（相ひ聚りて生を愉しむ、魚の釜の中に遊ぶが若し、其の久しからざるを知る）。」と、「史記」汲鄭伝「及廢門外可設雀羅（廢するに及びて門外に雀羅を設くべし）。」との故事に基づく表現。大きな力に運命を操られ絶命してしまふかもしれないか弱い命が描かれていることに注意したい。

最後に尾聯「身未衰微心且健、醫治有驗復如何（身未だ衰微せず心且に健やかならんとす、醫治驗有らば復た如何にかせん）。」では、転調されるというか、首聯や含聯で述べられたことを完全に打ち消す。この結句の「醫治」とは、医者による治療の意であろうか、ここから先程検討した「吟善淵博士・物章暨師兩才子新詩、戲寄長句。（善淵博士・物章暨師の兩才子が新詩を吟じて、戯れに長句を寄す。）」の「物章暨師」との脈絡を見出すのは、いささか牽強附会に過ぎるかもしれない。ただ、「大學士」に愛成を当て嵌めることを否定したいのも事実である。あるいは道真の周辺によく似た人物の一人とでも言えようか。

結論

菅原道真というと、幼少時の伝説を始め、孤高の人といったイメージが付きまとう。だが、そうした中にあっても、ともに詩を詠じ合う複数の友人の存在が見逃せないのではあるまいか。お互いの表現を参照し合い、批判し合い、詩作のためにそれぞれ切磋琢磨の営みがなされていただろう。それは讃岐という当時にあつては辺境の地であつてすらそうなのである。確かに道真以外の詩人の作品はほとんど遺っていないかもしれない。しかし、その一端は道真の詩句から推定できる。道真も、各々の無名な作者の詩の表現に触発されることもあつたのではないだろうか。そこに前代の勅撰三集時代の応製奉和の賦詩の表現の営みを連想するのは、深読みのし過ぎだろうか。

注1 秋山虔「菅原道真」『日本古典文学大事典』一九八四年四月、岩波書店刊)

2 本文は、本文及び詩番号は、川口久雄校注『日本古典文学大系72 菅家文章・菅家後集』(一九六六年一〇月、岩波書店刊)に拠つた。訓詁を改めた箇所がある。

※本稿は和漢比較文学会第四回特別例会(於中国西北大学)での口頭発表に基づく。

(本学教授)